

フロイス『日本史』

東光 博英

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの『日本史』は、織田信長や豊臣秀吉の時代の日本を克明に描いた記録である。一般に個人の記録は独自の環境下の限られた見聞を綴ったものが多いのに比べ、フロイスは豊かな在日経験と鋭い観察による取材はもとより日本各地に分散する宣教師たちからの情報や過去の記録、さらに日本人の文書まで利用している。彼が属したイエズス会は情報収集と会員の結束のため通信を重視していたので、各宣教師には一定の書式で現地情報や布教状況を定期的に報告する義務があり、日本から毎年報告書がヨーロッパに送られていた。彼らと日本の記録を比べてみると、信長が京都で引見した黒人について『信長公記』には「2月23日、キリシタン国から黒坊主が参上した。年の頃は26、7歳でもあろうか全身の黒いことは牛のようである。見るからにたくましく見事な体格である。その上、力の強さは十人力以上である。伴天連がこの男を召し連れて参上しお礼を申し上げた」とある一方、宣教師は「信長自身、彼を見て驚き、生まれつき黒いのであって墨による細工でないことを納得しなかった。たびたび彼を見、幾らか日本語を解したので彼と話して飽くことがなく、また黒人は非常に力があり、幾らかの芸ができたので信長は大いに喜んだ。今では彼を厚く庇護しており、その旨を諸人に知らしめるため、腹心の家臣一人を付けて市中を巡らせた」（ロレンソ・メシア書簡）と記す。日本の文書は信長の様子に全く触れていない。この一例から判るように海外史料は日本史料の不足を補うところが多いと言えよう。その点『日本史』が描く信長の人物像は好例である。「中くらいの背丈で華奢な体躯であり、髯は少なくはなはだ声は快調」と信長の容姿から、名誉心に富み、正義において厳格、戦を好み、侮辱を許さず、貪欲でなく甚だ決断を秘め、自らの見解に尊大で、日本の諸侯を軽蔑して「下僚に対するように肩の上から彼らに話をした」などの性格や、睡眠時間は短く早朝

に起床、酒は飲まずに食を節し、潔癖であるといった習慣にも言及している。これほど精細な史料は日本に無いという。また『日本史』は天文や気象、地震を記録している。本能寺の変の頃に出現した赤いオーロラ（赤気）について、「1582年の3月8日の夜の10時に、東方から空が非常に明るくなり、信長の最高の塔の上方では恐ろしいばかり赤く染まり、朝方までそれが続いた」とある。これは日本側の『立入左京亮入道隆佐記』にも同じ夜に「赤雲天下ヲ、イ」と記され、現代の『日本気象史料総覧』も「京都で赤気（極光）」としているが、フロイスによれば大分県でも見られたというから全国的な現象だったと考えられる。さらに日本の史料にない事柄を述べている。例えば信長は安土城内に惣見寺を建立して己の身代わりの神体を置き、己が誕生日を聖日として諸人に参詣するよう命じたという。信長の自己神格化である。歴史学者は日本にその片鱗すら示唆する記述がないことや宣教師に偏見があるとして否定的に見る者が多いようだ。イエズス会創立者のロヨラが言うように宣教師の書簡は「感化の書」でもあり、情報を伝えるだけでなく読者を感化することを目的とし、教化的内容に重きが置かれたから、時に誇張や脚色が混じっている。フロイスとて例外ではない。しかし、それ故に『日本史』が信憑性に欠けるというのは早計である。彼は秀吉の片手に指が6本あった（*Tinha seis dedos em huma mão*）と書いている。『日本史』訳者の松田毅一博士でさえ訳註で疑問を呈され、切支丹の迫害者であった秀吉への嫌悪感に駆られて書いたと推測されているが（第1巻、331頁）、後に「訂補」で『国祖遺言』の「大閣様ハ右之手おやゆひ一ツ多六御座候…」の記事を引用した上で、フロイスは世上の伝聞を基にしたと訂正された。一見怪しげな記述も宣教師の偏見と決めつけるべきではない。邦文史料との比較で信憑性が確認された例は多い。近年では岐阜城の山麓居館の発掘調査によりフロイスの記述を裏付けるような遺構が出土した。大阪府や大分県でも同様の事例があると聞く。遺構が記述を実証するなら、まさに動かぬ証拠である。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)